

[芸術教育記録]

平成27年度 全日本音楽教育研究会全国大会「静岡大会」 (総合大会) 研究報告

Research Report on the 2015 All-Japan Music Education Study Meeting in Shizuoka

小佐野 圭
Kei Osano

1. はじめに

全日本音楽教育研究会¹⁾(以下、全日音研と記載)は昭和44年11月に発足、第1回目の全国大会は東京文化会館で開催した。その大会主題は「創造性の開発を目指す音楽教育」だった。以来46年、隔年に部会大会を挟んで総合大会が開催され、今年で第24回目となる。学校教育に対する要請を背景にキーワードも「音楽愛好」「豊かな生涯」「豊かな心」「音楽の喜び」と推移してきたが、大会の根底に流れているのは「心」を基調とした質的な価値観の育成への強い願いである。

今年第14回東海北陸小中学校音楽教育研究大会・平成27年度静岡県教育研究会音楽教育研究部研究大会とも連携し大会主題は「ひろがれ音楽 つながる心」であった。小学校・中学校・高校・大学の4部会がともに研究成果を発表する総合大会として開催された(実行委員長 長野恭江)。場所は富士山を世界遺産とする静岡市である。第1日目(10月29日)は校種別研究会で、大学部会では、午前中に研究発表および研究協議、午後は総会の後、他の部会と合同でワークショップを開催した。文中、敬称は省略する。

2. 大会の主題と概要

2.1 主題

小学校・中学校・高等学校・大学の部会の研究主題は下記の通りである。

- (1) 大会主題「ひろがれ音楽 つながる心」
- (2) 小学校研究主題「つなげよう 感じる心とたのしい音楽」
- (3) 中学校研究主題「つなげよう ひろがる思いと わたしの音楽」
- (4) 高等学校研究主題「ひろがるイメージ 深まる感動 言葉が豊かにする音楽の力」

(5) 大学研究主題「つながれ音楽 ひろがる心～理論と実践の往還～」

大会主題「ひろがれ音楽 つながる心」は3つの研究構想図から構成されている。1つ目は自ら音楽に関わり追求する姿、2つ目は友達と関わり合い、互いの良さを認め合いながら音楽表現を深めていく姿、3つ目は生活を明るく潤いのあるものにする音楽の役割を実感している姿である²⁾。「ひろがれ音楽」には自ら音楽に親しみ、音楽を愛好する心情や音楽文化への理解を深めることで、子供の感性や豊かな情操を育みたいという願いが込められている。「つながる心」には、子供と音楽、子供同士の心、子供と教師の心がつながり創り出す喜びを味わってほしいという願いが込められている。

2.2 大会の概要と報告

2.2.1 参加者

おおよそ1100名の参加者があった。玉川大学からは、高須一（芸術学部芸術教育学科）、馬場眞二（芸術学部パフォーマンス・アーツ学科）、朝日公哉（教育学部乳幼児発達学科）、小佐野圭（芸術学部パフォーマンス・アーツ学科）が出席した。他、パフォーマンス・アーツ学科の学生4年生6名（教職受講生）が1日目のみ参加した。

2.2.2 全体概要報告

小学校は8つ、中学校は6つ、高等学校2つの公開授業が実践された。大学では5組の研究発表と1組の研究協議会が実施された。公開授業や研究発表、ワークショップを通して芸術への意識と価値観を高めるために、どのような課題があるのか、どのような工夫が必要なのか活発な内容が展開され、有意義な時間となった。

2.2.3 実際に見学した研究発表、ワークショップ等の報告

(1) 1日目大学部会について

報告（参加者の情報を集めたものを記述）大学部会は第1日目（10月29日）に5つの研究発表と1つの研究協議会が静岡市民文化会館2階第1会議室にて行われた。1つ目は高久新吾（浜松学院大学）の「地方自治体と大学との連携による実践的指導の研究」、2つ目は磯部哲夫（郡山女子短期大学部）の「歌唱共通教材の修辞学的音楽的解釈による教育実践報告」、3つ目は高橋摩衣子（皇學館大学）の「教員・保育者養成課程におけるコードネームの学習」、4つ目は平田裕子と森藤みこ（エリザベト音楽大学）による「音楽理論とソルフェージュの統合的学習」、そして5つ目、筆者の「エジソンから初音ミクまでの音楽聴取の歴史と今後の音楽鑑賞の戦略について」の研究発表である（写真1）。研究協議会は、田代和久（常葉大学教育学部）司会のもと、パネリストの井上幸子（常葉大学短期大学部）、森下華代（掛川市立大須賀中学校）、袴田文子（浜松市立県居小学校）らが「理論と実践の往還」をテーマにパネルディスカッションを実施した。



写真1

(2) 大学部会総会(参加全体60名)について

筆者は以下の3点の内容を発表した。1. 来年度、正式に大学部会は玉川大学で開催されること 2. 学内のカサド、原千恵子記念行事を合同で行うこと。3. 今井康雄教授の基調講演を実施すること。

この総会には筆者の他に玉川大学から高須一(芸術教育学科)、朝日公哉(乳幼児発達学科)、馬場眞二(パフォーミング・アーツ学科)が出席した。

(3) ワークショップについて

ワークショップはA会場(静岡市民文化会館)において6講座、B会場(常葉学園中・高等学校)において2講座が開催された。全部で8名のゲスト講演者が活気あるワークショップを行った。下記は実際に参加した講座のレポートを記述した。

2.3 ワークショップのレポート

2.3.1 「合唱～日本語の語感を生かした合唱指導法～」……合唱指揮者・大谷研二

楽譜について教示がお話の核になっていた。楽譜をどう読むかどう読み取るかということに着目して「何が、なぜ、どのように」ということを考えながら楽譜を読むことが重要である。人柄が滲み出るようなユニークかつ示唆に富んだ指導だった。大ホールにも関わらず、受講者への声かけを常に心がけていて、受講者の目線に立ち指導を行うことは特筆したい。

2.3.2 ワークショップ「音楽づくり・創作～音あそびするものよっといで～」……坪能由紀子

素晴らしいアイデアあふれるワークショップであった。クラッピングミュージック、トーンチャイム、参加者心をつかむ雰囲気づくりは実に魅力的で説得力があった。「音楽の基本、規則は大事だが、いかに規則をクリエイティブに崩すかがオモシロさ」という言葉が印象的だった。即興リズムを参加者全員で思いっきりたのしみ、その中でも指導上での効果的な言葉がけや実際の授業での取り入れ方まで、より実践に即した内容には感心した。

2.3.3 ワークショップ「リコーダー～笛はうたう、いい音みつけた～」……吉澤実

下記3.5学生たちのレポートを参照いただきたい。

2.3.4 ワークショップ「合唱～つながる歌声づくり～」合唱……眞鍋なな子

発表者は今年(平成27年度)の日本音楽学校コンクール(Nコン)の金賞受賞校(鶴川第2小)の指導者である。プロのように声を出すのではなく、今の子供のレベルより少し上をめざそう。指揮の図形で声が変わるとし、和声の捉え方が素晴らしい。

2.3.5 学生たちのレポートから(抜粋、原文のまま)

◇芸術学部4年

午前の部において附属静岡中学校(歌唱)を見学した。歌唱指導はどのようにしたら生徒が主体的に授業に取り組むことが出来るのかをよく考え、構成された授業展開でした。また、グループワークを通じて音楽を楽しんでいる様子がうかがえて、参考になったので自分も実践してみたい。

午後の部においてワークショップ(リコーダー)を見学した。リコーダーの基礎知識を理解することが出来た。リコーダーをどのように活用して授業展開していけばよいのかとても勉強になった。実際に、音色や

アンサンブルで生徒が楽しめるような教材や声かけをしていきたいと思います。

◇芸術学部4年

中学部会の授業をみて現場で実際に行われている授業、実際の生徒の反応が見られる場はとても貴重で参考になりました。生徒1人ひとりが自分はどうのように表現をしたいのか意図をもって歌の発表に臨んでおり、生徒の音楽を学ぶのが楽しいという気持ちが伝わってきました。自分もそのような授業ができる教師になりたいと感じました。

ワークショップ（リコーダー）を見学した。いろいろなサイズのリコーダーやリコーダーに似ている世界の楽器などを紹介してもらい、とても興味深いものでした。リコーダーだけでなく、歌とリコーダーを合わせて演奏する教材などの紹介もあり、教育の現場でリコーダーを学ぶのが楽しくなりそうだな、と感じました。

◇芸術学部4年

大学の教員が未来の教師を育てるために様々な取り組みをしていることが理解できた。ピアノを解体する授業や、フィグーラを用いて音楽的表現を共有する方法など、私の知らなかった情報を知ることができた。私が特に興味を持ったのは、ソルミゼーションとハンドサインを使用した実践である。この方法は初めて知ったものであったが、これを利用することで、音楽の苦手意識を改善することができると感じた。自分が現場に出たときも、取り入れていきたい。ワークショップのリコーダーでは、魅力的なリコーダーの曲とリコーダーの種類を知ることができた。

2.3.6 レセプション

レセプションは1100名が会場に出席。玉川大学の教員は玉川の代表として、ステージへ立った。来年度、大学部会は玉川大学で開催することを告知し、多くの参加をユニーク且つ玉川流の歌によって呼びかけた。

2.3.7 2日目「全体会」(写真2)

全体会は、清水港近くの清水文化会館マリナートにて、藤枝順心中高のアルプスホルンの演奏からスタートした。



写真2

- ・全日音研会長・福井直敬挨拶：静岡大会開催にあたり各関係への感謝のあと、平成32年から輪番制にならって開催することが告知された。
- ・来賓の教員たちの挨拶
- ・文科省から、津田正之教育課程調査官、白井学教科調査官が1日目の各種発表、授業等への総評を行った。
- ・各小学生、中学校高校生による演奏会

・記念講演 特別ゲスト伊藤康英 作曲家からみた「富士の山」

和声が重要という話であった。主要和音、IとVで出来ている有名な曲は、という話になり、モーツァルト《もう飛ぶまいぞ……》などは、ピアノを弾きながら歌いながら説明した。ご自分の小学校、中学校時代における音楽体験の話から「和声」は重要であるという体験が作曲する契機となったそうである。《富士の山》の基本的なI IV V和声付けからはじまり、多種多様な和声を取り入れながら伴奏していく過程は、作曲家ならではの講座だった。一部アレンジ楽譜は、下記より。<http://www.itomusic.com/2015/10/30/>よりダウンロードして使用可能とのことである。

・来年度、部会大会について

小学校、中学校、高校は北海道函館、道南で開催。丸山忠璋現大学部会長が、大学部会は玉川大学開催(平成28年10月22日)のことを発表した。

3. 研究成果

八木由弘研究部長は、大会の成果として下記のように、述べている。音楽のよさを感じ取りながら思いや意図をもって表現すること、校種間の連続性・系統性をふまえた指導内容について研究することが、子供の実態に即した題材構成や指導過程の工夫に結びつき、子供の主体性を導き出すことができた。教員が研究のやり方を学び、言語活動を適切に取り入れるなどを具体的に実践していくことで、協働的に研修を推進することができた。子供の姿を具体的にイメージしながら教材研究を進めることが、子供の表れを価値付け、必要な指導と評価につながる³⁾。

4. 来年度に向けての抱負

来年度は玉川大学において2016年10月22日(土)に大学部会大会開催が決定している。今回の全日音研を通じて「音楽で心を育てる。音楽で人をつなげる大切さ」をあらためて認識した。全国から1100名の音楽教員がワークショップ、研究授業、演奏会、に参加したことは、有意義な良い時間だった。小中高の先生方は惜しみない努力をされ、音楽授業の情報交換をしている。音楽教科と他教科、地域教育、生涯教育との往還など様々な可能性も追求していた。大学教員も良い緊張感を持って臨まなくてはならないと、あらためて身が引き締まった。

全日音研会長、福井直敬武蔵野音大学長にも直接お話することができた。小原芳明学長とも親交が深いこと、小原学長も全日音研の主旨を十分に理解されているとのことを伺った。来年度に向けて「おもてなし校」として、玉川大学音楽教員の先生(のみならず関係各位)にはご尽力をいただかなくてはならないだろう。来年、10月22日はカサドの記念行事と重複しているが、教員間、良い連携を行っていくことが重要かと思う。人数は静岡大会の大学部会参加者は60名だった。来年は今年以上に、盛会にできたらと考えている。音楽教員のみならず学部長はじめ学科主任、教務主任はじめご協力をいただきながら玉川らしい大学部会実施に向けて取り組む覚悟である。皆様のおお恵をお貸しいただきながら進めて参りたいと考えている。

結びに静岡大会において長野恭江実行委員長、ならびに静岡県の先生方、文部文科省、関係教育委員会、関係機関、さらに音楽教育関係者の皆様にご指導、ご支援いただいたことを深く感謝申しあげたい。静岡大学北山敦康教授には並々ならないご尽力をいただいたことを合わせて報告する。

注

- 1) 全日本音楽研究会 福井直敬会長の平成27年度の全日音研（静岡大会）におけるパンフレットの挨拶文から引用
- 2) 平成27年度の全日音研（静岡大会）におけるパンフレット12ページ、八木由弘（静岡市立安藤中学校 教諭）研究部長の文章から引用
- 3) 平成27年度の全日音研（静岡大会）におけるパンフレット15ページ、八木由弘（静岡市立安藤中学校 教諭）研究部長の文章から引用



写真3

(左から朝日公哉、筆者、高須一、武蔵野音楽大学加藤徹也教授、静岡大学北山敦康教授、宮崎幸次大学部会事務局長)